

久野量一

二〇二三年度は建学一五〇年ということもあって、出版会も機に乗じてたくさん本をつくった。『東京外国語大学150年の歩み』（東京外国語大学文書館編）はその成果の一つである。読売新聞立川支局と連携した全一一回の連続市民講座「世界を学ぶ、世界を生きる」も建学記念行事の一つとして、出版会から刊行した書物を中心に組み立てられた。この講座を通じて多くの方に刊行物を見ていただけたと思う。

新しいシリーズ「トランスギヤルド叢書」を立ち上げ、二冊を同時刊行した。意外なことに、出版会で欧米の文芸書を翻訳するのははじめてだ。『ここにあることの輝き パウラ・M・ベッカーの生涯』（マリリー・ダリュセック著、荒原邦博訳、原書フランス語）と、『それぞれの戦い エミー・バル＝ニンクス、クレア・ゴル、エルゼ・リューテル』（アンナ・ラインスベルク著、西岡あかね訳、原書ドイツ語）、ともに先鋭的な読み物だ。アフリカでのフィールドワークの経験は『ガーナ流 家族のつくり方 世話する・される者たちの生活誌』（小佐野アコシヤ有紀著）に結実した。『ウクライナの装飾文様』（巽由樹子訳・解説、原書ロシア語）は、ウクライナに生まれてロシアで活躍したミコラ・サモーキシユのスケッチをまとめたフルカラーの図版集である。

語学書ももちろん続いている。『モジュールで身につくトルコ語』（津久井優、川口裕司著、菅原睦監修）は、語学を学ぶウェブサイトをとして人気のある「東京外国語大学言語モジュール」に基づいている。そして好評シリーズ『大学の〇〇語』では、『大学のキルギス語』（アクマタリエワ・ジャクシルク、大崎紀子著）が刊行された。

嬉しいことに、『朝鮮人シベリア抑留』（金孝淳著、渡辺直紀訳、二〇二三年二月刊）が『第九回シベリア抑留記録・文化賞』を受賞した。重版されたのは、『日本をたどりなおす29の方法』（第五刷）、『直接法で教える日本語』（第六刷）、『大学の日本語 初級 ともだちVol.1』（第四刷）、『大学の日本語 初級 ともだちVol.2』（第三刷）、『世界を食べよう！ 東京外国語大学の世界料理』（第七刷）、『大学のフィリピノ語』（第四刷）、『よくわかる逐次通訳』（第八刷）である。

書店が激減する昨今、本の存在を知ってもらうためにかける努力は難度を増している。極めて小さな試みだが、当出版会はFacebookに広告を出しはじめた。本をつくるとともに、これまでにつくった本も動いていく、動かしていく。

多くを読み、多く旅する者は、多くを見て、多くを知る（ミゲル・デ・セルバンテス）

く・りょういち 東京外国語大学出版会編集長